第388号（令和３年６月１日㈫発行）
発行所
京都女子大学 宗教部
京都市東山区今熊野北日吉町35
電話 075（531）7074

南無阿弥陀仏

時有僧出問、「如何是無位真人？」師下禅牀、把住云、「道道」。其僧擬議。師托開云、「無位真人是什麼乾屎橛」、便帰方丈。

（『臨済録』）

ためらう薔薇

仏教学非常勤講師　清基秀紀

バラが開く

大学生の頃、第二外国語として学んでいたフランス語の課題に、詩の訳があった。

そのなかで、どうしてもうまく訳せない一文があった。今となっては元のフランス語は覚えていないが、英語で言えば Roses are half open そのまま訳せば「バラは半分開く」だが、どうも詩的ではない。

悩んだ末に「バラはためらい開く」と訳したが、少し暖かくなって、逡巡しながらゆっくりと花を開かせるバラを思い、自分でも気に入った訳となった。

逡巡

人は確固たる自信がないときに躊躇をする。本当にこの選択でいいのだろうか、私にそれが出来る力があるのだろうかと考えるのである。

それは自分自身の弱さを認めているからである。自分自身の弱さを認めず、自信たっぷりに進む強い人を見ると、少しはうらやましくもあるが、自分にはとても出来ないと思う。本当は、自分の決断にそれほどゆるぎない自信をもてるほど、人は強くはない。

しかし時に人は、その自分の弱さをかくすために、誰かの強い決断に共感する。本当はそうではないかもしれないが、そう思い込むほうが楽なのだ。自分も強いものの立場におくことができるのである。

強者への共感

アメリカの大統領選を見ていると、負けを認めずに強がる候補者に、いさぎよく負けを認める勇気はないのだろうかと不思議に思うが、もっと不思議なことは、強引な強がりに共感するアメリカ人の多さである。

自信や強さに共感することで、自らの弱さを覆い隠しているように見えてくる。自分自身をきちんと見つめることなく、他人の強さに無批判に共感することの危うさには、なかなか気付くことはできないようである。

コロナ時代の問題

昨年は新型コロナウィルスの感染拡大の影響を受けて、大学も大変な一年を過ごした。その影響はまだ解消されてはおらず、今年度も不自由な大学生活を強いられることになりそうだ。

ウィルスの感染は確かに恐ろしいが、それ以上に恐ろしいのは、どうやら人間のようである。

感染者に対する非難や差別は想像を絶するものがある。医療従事者に対する偏見も報告されている。うわさ話を信じ込んで誹謗中傷に加わる人の話を聞くと、人はどうしてあんなに残酷になれるのだろうかと思う。

自粛が不十分な他者への批判も度が過ぎている。いびつな正義感は自粛警察と呼ばれるが、その正義感に酔いしれている人は、そこにある問題点にはなかなか気付けない。

その論理に潜むのは因果論である。コロナに感染した人は、その人に原因があって、きっと何か悪いことをしたからに違いない、感染拡大が収まらないのは自粛が充分でない人や店の責任だと批判を強める。

人類が、かつてない程の困難に直面した今こそ、一人ひとりの人間性が問われることになるが、どうやらその負の面が表面化したようである。

自分自身を善の側において他者をさばく。テレビのワイドショーでは、毎日そのようなコメントが繰り返され、それを見る多くのものが共感する。他者を批判することによって、自らを善だと思い込む、その姿勢に欠けているのは、自らを見つめる目である。

仏の眼

仏像の眼は完全に開かれることなく半分閉じられている。それは半眼とよばれるが、半分は外の世界を、半分は自分自身の心を見つめていると説明される。

私たちは、自分自身のありのままの姿をみつめてはいない。私のことは、私が一番知っているなどと思うことが、そもそもの間違いである。

私という人間はどのような人間か、他人の意見を聞いてみると意外なほど、自分の思う自分とは異なっていることに驚く。しかし、よく考えて見ると、確かに自分でも気付かなかった面があることを知らされる。

釈尊のさとり

釈尊のさとりは、世の中の人びとのありさまをながめて、そこにある問題点を見つめ、その解決策を見つけたのではない。

釈尊は自分自身を見つめた。生老病死といった根本的な苦は、誰かの苦ではなく、自分自身のなかに存在する苦であった。それを解決する道を命がけで見つけたのが、釈尊のさとりである。

他人の苦に共感して癒やしを与えるのではなく、何よりも自分自身の苦と向き合い、それをごまかすことなく根本的な解決を求めたのである。

親鸞の自覚

親鸞も自分自身を深く見つめた。

比叡山でさとりに向かう仏道を二十年間歩んだ青春時代は、目標に向かって自分自身を信じ、真面目に修行の日々を送る充実した日々のはずだった。

しかし、前を向いて進むだけでなく、自分自身をしっかりと見つめると、違う自分が見えてきた。

さとりに向かう善の道を歩んでいるはずの自分自身は、本当に心から善なる存在、善人なのだろうか。煩悩をなくすために厳しい修行を続ける自分自身の心は、本当に清らかになったのだろうか。

親鸞は悩んだ。このような自分は本当にさとりへの道を歩んでいるのだろうか。

親鸞は自らを煩悩に充ちた存在であると自覚した。そして、人間というのはそのような存在だからこそ私が救いたいと願ってくれた仏がいる事を知った。それが阿弥陀仏であり、その願いが本願なのである。

親鸞は、まさにその願いこそが、自分のための願いだと考えた。自分をみつめる眼をもたなければ、決して見えない願いであった。

ためらう薔薇

ためらう薔薇は美しい。自信たっぷりに堂々と咲き誇る薔薇も美しいが、陽ざしの明るさに開きかけたものの、自信がもてずに逡巡する、その弱さも、私にとっては美しいのである。

ことばの窓 ③「ちょっとした」違い

かつて、「KY」というフレーズが、盛んに用いられました。「空気読めない」という表現を元に、二つの文節から頭文字をとった言葉です。

人と人との意思疎通は、主として言語に拠りますが、コトバだけの遣り取りでは、限られた情報しか授受できません。相手の口調や表情、身振り手振り、さらには、まさに「空気」としか言い様のないものを感じ取ることによって、相手の気持ちの陰翳等の大切な主観的情報を、私たちは実に敏感に感知しています。それによってコトバの受け取り方も大きく異なってきます。現今の、マスクをした状態での会話では相手の表情が読みにくく、思いもしなかった厳しい反応が返ってきた経験を、皆さんもおもちではないでしょうか。

昨年度から始まったオンライン授業では、まして、相手の様々な情報を受け取ることが難しく、話者も聴者も、戸惑うことが頻繁に発生します。オンデマンド授業動画となると、授業を受けている方からのフィードバックが完全に欠落しており、「空気を読む」ことは全く絶望的です。このような現在の特殊状況では、なおさら言葉遣いに神経を尖らせることが、まずは、求められています。今回は、「ちょっとした」違いのあるコトバにふれます。

皆さんは、「終日」と「全日」との使い分けを明確にご理解されているでしょうか。前者は「一日中」という意味の言葉で、必ずしも24時間ではなく、状況次第で継続時間が決定されます。後者「全日」も、「一日中」という意味ももっていますが、「毎日」という意味もありますので、注意が必要です。

「万一」と「万が一」とは、どうでしょうか。ともに「万に一つ」という意味ですが、「万が一」の方が、より強調されて聞こえます。「重い」を「重たい」と表現しても同様でしょう。ただし、こういう強調表現は、話者の気持ちまでも強く伝えようとするため、聴者の側で、その「気持ち」を余計なものと感じてしまう危険性があります。「朝から」を「朝っぱらから」と強めて表現するのも、そうしたリスクがある上に、くだけた印象まで与えかねません。聴者が、このような余計なものを押しつけられ不快だと感じてしまったなら、意思疎通に大きな支障を来しかねません。

会話という、人間の基本的行動にとっても、現在は、非常に厳しい状況にあります。ただ、せめて、これを、コトバについて改めて思いを致す機会にしたいと思います。

（国文学科・田上　稔）

澪標

私たちの物事の見方というものは、幼い頃から無意識のうちに身についているものが少なくない。たとえば「裁判官」をイメージした時に、多くの人は男性を思い浮かべるのではないだろうか。このような心のフィルターは、差別にさえつながりかねない危うさを持つ。

一方、好ましい心のフィルターもある。二〇〇一年、アフガニスタンのバーミヤンにある石仏が、イスラムの過激派によって爆破された。この時の衝撃的な動画は、今もウェブ上で容易に視ることができる。この時、世界の仏教徒から、「残念だ」という声は無数に挙がった。しかし「奴らは許せない、殺せ」という声は出なかった。

仏教は、すべてのものはとどまることなく変化し続けている、という現実を直視する。諸行無常の教えである。仏像であれ文化財であれ、いずれ必ず、その存在が失われることを、仏教徒は承知しているのである。

日本でもバーミヤンの石仏破壊を惜しむ声は挙がった。しかし「奴らを殺せ」という声は出なかった。これは、日本文化の基底の一つに、確かに仏教があることを示す例であろう。つまり日本に暮らす多くの人々の間に仏教的なフィルターが共有されているのである。

良きにつけ悪しきにつけ自分の持つ無意識のフィルターに自分で気づくことは難しい。仏教の学びは、自己を学ぶことだといえる。ことに自己中心のフィルターを学ぶことに、仏教を学ぶ重要な意義がある。（義）

生きている不思議

家政学部教授　片山　勢津子

本学に着任したのは平成五年四月一日。辞令を貰ってすぐに一泊二日の新人研修に出た。建学の精神を学び西本願寺にお参りするというものだが、全く宗教と関わりなく過ごしてきた私にとって、それは大変なカルチャーショックで、夜は一睡もできず高熱を出した。何しろ、お墓参りの習慣もなく、仏壇もなく、宗教的な行事が一切ない中で育ったのだから仕方ない。でも、これがきっかけとなって、母の家が浄土真宗門徒だったと知り、自分のルーツを少しずつ探っていくこととなった。

以前、ルーツの一部を書いたが、それから色々気付くことがあったので、この機会に追記したい。

感染症

昨年来、新型コロナ感染症の拡大で、世の中は一変した。去年の三月、これから一体どうなっていくのだろうと不安に駆られて、パンデミックを描いたアルベート・カミュの『ペスト』を読み始めた。そしてスペイン風邪で、父方の曽祖父が急死したと、母から聞いた。残された祖母や曽祖母ら女達に泣きつかれたのだろうか、祖父は故郷に帰ることなく、逗留していたその家の婿養子となった。

祖父は、故郷である鹿児島の産業育成のために彫刻技術を学ぶように県費で東京の学校へ派遣された青年だった。それがどうして技術指導のために知り合ったというだけで、使命を違えて祖母の家の養子になったのか。ずっと気になっていた訳が、漸くわかった。

彼の生まれは、母と同じく東シナ海に浮かぶ甑島である。ドラマになった『ドクターコトー診療所』が現存するので少し知られてきたものの依然ひっそりした離島である。

隠れ念仏

江戸時代、薩摩藩では浄土真宗は禁教だったが、島のほとんどが隠れ念仏だったという。そのため、度々弾圧があり島唯一の商家だった祖父の先祖の夫婦が浜に縛られ、夫が命を落とした。男の方は逆さ吊りだったというので、溺死である。何と酷い！　これを知った時は言葉を失い、見せしめにされた理由をただしたかった。

祖父の家は十六世紀中頃、中国福建省から渡ってきた「江夏」族を祖とするようだ。一族は島津に仕えて各地に散り、大陸との貿易を行なった。だから、密貿易のおかげで暮らしているのに藩に背いたことから処刑された訳だ。因みに、阪神の名投手だった同じ姓の江夏豊も鹿児島がルーツなので、昔は同じ家業だったと思う。

祖父は時々、不思議な印を組んで瞑想していて、子供心に不審だった。今思えば、宗教弾圧された過去故に、祈りを自らの心に封印していたのだろう。養子だから祖母の家の墓地や仏壇があっても良さそうだが、何故か祖母も話したがらなかった。その家は、紀州藩の儒学者がルーツだというので、食い扶持を求めて、家を捨てたのだろう。苗字も変えている。

隠れキリシタン

一方、母方の先祖が甑島に渡ったのは、十七世紀初めである。初代と二代目が「禅師」と記されているので布教のために渡ったと想定できる。母の家は熱心な信者である。生家には、集会所として使われていたと思しき土蔵造りの建物があった。若い頃、図書館収蔵庫で見つけた日本建築学会論文集に「不思議な建物」と紹介されていたのを、偶然読んだことがある。

母が島で過ごした家は、何時かの大きな台風でとうとう屋根が飛んでしまい、今は小さな社しか残っていない。伯父が整理したところ、鳥居のあるこの社から三つの石を見つけた。その一つに「主」と刻まれていることから、元は隠れキリシタンだったようだ。伯父はキリシタンの証しを、幼い頃に見たようなのだが、父親、つまり私の祖父が早逝したため、よくわからずにいたらしい。甑島は天草に近い。

何時だったか、ゼミ生から浄土真宗とキリスト教との類似性を教えてもらったことがある。仏教学の授業で、遠藤周作の『沈黙』を読む課題が出たという。すぐに私もこの本を読み始めたのだが、隠れキリシタンだった先祖の苦難を思うと、涙が止まらなかった。その後、映画になった『沈黙―サイレンス―』も見たが、こちらはむしろ冷静に鑑賞できた。弾圧の様子や、転びキリシタンの心の変化を見ながら、先祖の逃避行を思った。

伯父も三つの石を見つけて以来、家のルーツを探った。子供の時に、四度の戦に負けて島に流れてきたと、囃された記憶があるらしい。彼の推理では、キリシタン大名だった土佐一条氏の元で戦に敗れ、九州のキリシタン大名を頼って甑島に辿り着いた、ということだ。伯父は石を納めるために、自分の庭に石造の祠を造った。

生きている不思議

宗教は、安らぎや救いを求め、生きるための道標としてあると思っていた。だが、本学に来たことを契機に宗教に触れたことは、私にとってはルーツを探り、苦難を超えて時代を生きてきた人々に想いを馳せることとなった。幼い頃から、寝る前に無事に一日を過ごせたことを感謝して祈るよう、母に躾けられた。祈りの対象は、神様でも仏様でも良いけれども、御先祖様に感謝しなさいと言われていたように思う。祈りを通じて過去を遡れば、生きていることの不思議を想わずにはいられない。

法のことば

時有僧出問、「如何是無位真人？」師下禅牀、把住云、「道道」。其僧擬議。師托開云、「無位真人是什麼乾屎橛」、便帰方丈。

（『臨済録』）

禅の問答では、「如何なるか是れ無位真人」や「如何なるか是れ祖師西来意」という形式で、修行者自身が体得したさとりの本質を問うことがあります。

上記では、臨済義玄（？～867）は「乾屎橛」すなわち「乾いた棒状の糞」と答えます。そして相手を突き放して、その場から去ってゆきます。

なぜ「乾屎橛」という表現を採ったのか。それは希求すべき対象としてのさとりを絶対化してはいけないことを教えるためで、いわば反措定的な表現です。

用意された答えだと永遠に外在的な知識となり、修行者は二度とそれを活きた事実として自分自身の上に気づくことができません。

大学での学びも同じではないでしょうか。答えが用意されていない問題にとりくみ、自分自身で見つけ出してこそ自分の血肉となってゆくと強く思います。

（中西　俊英）

シリーズ　智慧の蔵㊳

『聖徳太子―実像と伝説の間―』

石井公成　著　春秋社　二〇一六年

伝説と謎にみちた人物、聖徳太子。本書は聖徳太子の実像を、現存する資料をもとに丁寧に読み解いていく。

「聖徳太子」と聞いて、みなさんはどのようなイメージを持たれるだろうか。かつて日本の紙幣に度々登場された人物だ、とか、『憲法十七条』や「冠位十二階」を制定して国の礎を築いた優れた政治家だ、とか、はたまた日本に仏教の導入を牽引した偉大な宗教者であるとか。

聖徳太子のイメージは、時代によって変遷が見られる。本書でも述べられているように、古資料では仏教興隆の立役者。平安時代から鎌倉時代にかけては、浄土信仰の隆盛とともに、人々を浄土へと導く観音菩薩の化身として信仰されたり、中世から戦国時代にかけては兵法の達人、戦いの神としても崇められる。江戸時代になると、四天王寺や法隆寺を建立したことから大工や鍛冶屋・桶屋などの工匠の祖として崇拝され、江戸時代から明治時代にかけては一部の儒学者や国学者から、その政治的立場や異国の宗教である仏教を導入したことを批判されたりもしている。一転、明治時代後半には大国との平等外交の祖、憲法の祖などの功績を通して再評価されていく。戦後になると、『憲法十七条』の「和を以て貴しと為す」という言葉から、民主主義・平和主義を説いた人物として解釈され、ひろく受け入れられてきた。

これほどまでに、多様なイメージや評価で語られてきた人物が、かつて日本の歴史上にどれほどいただろうか。ただ、その実像については、限られた資料のなかで現在も多くの議論があり、謎につつまれている部分も多い。しかし、その謎がまた人々を惹きつけてやまないのである。

本書は聖徳太子とは一体何者であるのか、という命題に基づいて、古代史・仏教史・美術史などの学術成果を駆使し、太子の実像を広範な資料をもとに考察していく。

「聖徳太子の呼び名」について、「聖徳太子虚構説」について、「聖徳太子一族の滅亡」について。どこか気になっていたトピックを次々と取り上げては論じ、読む者に多くの示唆を与えてくれる。

今年は聖徳太子が世を去られてから、千四百回忌の節目にあたる。本書は千四百年の時を超え、影響を与え続けてきた聖徳太子という人物の実像を、あらためて確認することのできる一冊である。

（赤井　智顕）

お知らせ

宗教・文化研究所公開講座（ご案内）

シリーズ：東山から発信する京都の歴史と文化㉒
テ　ー　マ：中世の東北・南九州と京都

開催日　令和３年10月９日（第二土曜日）13：00～17：00

第一部　13：00～14：30
「イオウガシマ、キカイガシマ、琉球を見る目」
講師　ラ・サール学園教諭
永山　修一　氏

第二部　15：00～16：30
「宮城県で見つかった京都の中世」
講師　東北大学大学院教授
柳原　敏昭　氏

場　所　Ｂ校舎501教室

※当該公開講座は毎年６月に開催していますが、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点により、日程を上記の通り変更しました。

なお、今後の国内や本学の感染状況によりましては、開催が取り止めとなる場合があります。その場合は、大学ホームページ・京女ポータルにてお知らせします。